

ADHD 傾向のある方の力を引き出す活動設定と関わり

～Eさんの事例を通して～

いちばん星 古市 新

1. はじめに

ADHD 傾向が見られる E さんへ 3 年間の支援を通して見えてきた、集団の中での支援と、個別性を重視した支援の両方を行う事により、本人の力を発揮できる環境や活動設定の重要性について述べる。

2. いちばん星桐生について

(1) 経緯

いちばん星桐生は、主に重度知的障害、自閉症、行動障害を呈する方たちが日中活動を行う生活介護事業所である。現在の利用者数は 12 名。

ステップ広場ガル日中活動の分場であった天津市牧にある建物で、いちばん星の事業を開始する。当初はステップ広場ガル入所者のみが利用をしていたが、地域から通所する利用者の方も加わった。2015 年からは、地域より通所される方について、活動拠点を天津市桐生にある建物へ移し、新たに認可された生活介護事業所“いちばん星桐生”となった。

(2) 活動内容

散歩や畑活動(運搬活動)を通して心身発散ができ、行動の調整や生活リズムの安定などに繋げることを大きな目的としている。また、粘土・感触活動や絵本・絵画といった好きな感触に触れる活動のほか、自立課題活動では手先を使う作業系の内容も実施している。活動の中で他者との手つなぎや 2 人で物を運ぶなど、集団を意識できる機会も大切にしている。

3. E さんの紹介

(1) 年齢・性別

22 歳・男性

(2) 障害名

知的障害

(3) 障害区分

6

(4) 行動スコア

15

(5) 発達の状況

2歳程度(2020年6月9日実施の発達検査結果による)

(6) 現在の取り巻く環境

養護学校高等部を卒業し、月～金曜日は“いちばん星 桐生”へ通所している。家族と同居。いちばん星以外には月に数回のショートステイや、週2回(月・土曜日が基本)のヘルプを利用している。

(7) 特徴

日々、様々な刺激を受け、自ら刺激を求める事もある。本人が“楽しい”と感じる事が好きであり、そう感じる出来事を定期的に求めているようだ。特に人とのやり取りへ関心を持っている。また、他者を思いやる一面もあり、活動の中でお手伝いをしたり、気遣いのある言葉がけをしたりといった様子が見られる。

一方で、興味の激しい移り変わりや、集中力の持続時間も短いといった様子もみられ、ADHDの傾向が垣間見えることもある。また、刺激量が多くなりすぎると感情コントロールが難しくなることがある。

4. 通所開始

(1) 通所開始直後の様子

養護学校高等部を卒業し、“いちばん星 桐生”への通所が始まる。いちばん星 桐生は、散歩や畑活動を通して、身体的な発散ができるという側面においては、本人のニーズに合っていた。しかし、他者とのコミュニケーションという面においては、言葉のやり取りといった、他利用者からの反応が無く、本人の求める関わりより希薄な部分がある。その希薄な部分に関しては、主に職員との関わりに依るものとなっていく、通所年数が経過するにつれて、本人と距離感を適切に取る事が難しい時もみられるようになる。

(2) ニーズ・課題

① 人との関わりを求めるあまり

人との関わりにおいて、関係性を本人から作り上げていくことが多い。本人なりに“この人とは楽しく遊ぶ”“この人とは少し緊張して関わる”など各々の役割を決めている。特に行動・言動によって本人が注目されたり、職員とのやり取りが出来たりすると、過集中気味になり、次第に離れたくても離れられないという状況が生まれる。結果として、急な苛立ちや、その相手に対する他害といった不穏な様子を見せ、いわゆる不適切な行動に繋がる事もある。

② 注目してほしい…

人との関わりを求めるあまり、様々な表出が見られている。たとえば、畑活動におい

ては、作業そのものを拒むことはない。しかし、本人が興味を示した作業を独自の方法で行う様子が見られた。職員からの提示では、バケツを使って素材(水)を運ぶ作業であるが、一人、一輪車にバケツを載せて運ぶなど、他利用者とは違う動きをするといった具合である。また、作業へ向かう意欲も、当日担当している職員によって違っていた。関わり方は相手の性別や本人が決めた役割の違いによって表出も異なる。職員が一对一で対応していると、過集中気味になる事があったため、職員が入れ替わりながら対応をした。それによって、本人の興味関心が移り変わり、気持ちを切り替えができる場面が多くみられる。また、職員の異動・退職があると、本人なりに思っていた各々の役割のバランスが崩れる。お試しを含めた注目行動が目立つようになり、活動への参加が難しくなるような場面もあった。

活動へ参加する事ができた時などに、職員が称賛するという関わりを持つ。しかし、これまでの本人の経験からか、“称賛される”という刺激にはあまり反応しない事も多い。

これからの表出から、本人が人との関わり(特に職員)に強く影響されている事が見立てられた。

③本人を取り巻く“刺激”の数々

人とのやり取りへ関心を向ける姿が見られているが、その他にも物や行事など、様々な刺激に興味向きやすい。

物への興味は、特に自宅から持参される玩具が多い。ぬいぐるみや、腕時計状のものをよく持参されていた。散歩や畑活動の際にも持ち歩き、職員が施設へ置いていく事を提案しても拒否することがよく見られた。しかし、興味はすぐに移り変わる。玩具を散歩場所近くの川や、走行中の車内から投げるなど、職員の注目を引くという刺激を求めての行動に使う道具とする場面も多くあった。また、単純に何処かへ置いてきてしまい、時間が経過してから気づくも見つからず、いらだった様子を見せる事もあった。

日々、様々な刺激を受け、また人との関わりという面では、自ら刺激を求めている。しかし、刺激が多くなりすぎると感情コントロールが難しくなり、泣いたり怒ったりを短時間で繰り返す、他者に対して手を振り上げようとする事や、物を投げる等の行動に繋がっていた。

④発達検査へ

これまでの支援を通して、ADHDの特性もあると思われるが、本人とのやり取りや認知、身体の使い方での発達状況に関連すると思われる部分もあった。特に身体の使い方では、発音が難しかったり、下りの階段を怖がって、ゆっくりと先へ進んだり、走り方も独特であった。また、いわゆる問題行動をした際には、ぼつが悪そうな表情をしたり「おっしょ」と言って、その場から去ろうとしたりするなど、相手の反応や雰囲気状

況を認識しようとしている場面も見られる。発達状況を改めて確認し、本人理解や支援に活かすことができるよう 2020 年 6 月、びわこ学園より石井先生を迎え、受検する事となった。

5. E さんのニーズや特性の理解と支援

(1) 発達検査を通して

発達検査の結果としては、職員の見立てが裏付けられたような恰好となった。限定された空間で取り組むことが明確であり、加えて見守る人がいる状況においては、安定的に力が発揮できるようである。“好きな職員”との二者関係に終始しないような関わりが大切であり、“○○さんと●●する”という三項関係を築くことが基本的な課題という事が分かる。三項関係を築くことによって本人や支援者の負担が減るのではないかとアドバイスを受けた。検査時点で通所開始から 2 年が経過しており、職員との関係性も強くなりつつある環境で、職員から活動内容を本人へはっきりと伝える事により、その通りに作業へ取り組んでいる様子が評価された。

(2) 職員から三項関係での関わりをもつ取り組み

発達検査から、心身の発散不足や課題の不明瞭さ、達成感の低さを感じると注目行動が増えること。本人の行動や言動をすべて受け止めると、本人の中でも收拾がつかなくなり、不穏となってしまうことを確認した。

本人の発信を程よく受け止め、一定の型(一日の流れや、活動など)に沿って支援する視点が重要である。そこで、活動毎にスタンプを押すカードを作る(活動へ参加するとスタンプが一つ押され、一週間でカードの枠が埋まるというもの)。それを通して職員から関わりを持つと同時に、スタンプカードや活動内容などで三項関係を築き、活動へ参加する動機づけとなる事を狙いとした。

導入当初は概ね興味を示し、活動終わりに押印を続けていたため、本人から求めてくることもあった。“物”を通じて本人と関わるツールとなっていたが、次第にスタンプカードを他利用者に渡すという行動が目立ち、2 カ月あまりで中止となった。

(3) 個別性を重視した取り組みの検討

スタンプカードは本人との関わりを持つツールとしては良いものであったが、長期にわたって本人の興味関心を引き付けられるという形ではなかった。一週間で埋まるカードであると、その期間中にカードを持ち続けなければならない。一枚のカードに対して本人の興味は渡されてからしばらくの間のみ続いている様子であった。

この事を踏まえて、一週間に一枚のカードを完成させるものから、一日の一枚のカードを完成させるものへと変更した。毎日、スタンプカードを貰う職員とのやり取りから始まり、その日のうちにカードが完成する。合わせて、完成したカードと引き換えにお菓子を

渡すことで本人の興味関心が示される事を狙った。

取り組みの結果として、現状はコミュニケーションツールの一つとなっており、活動へ参加するとスタンプが貰えるという因果関係は意識していない様子である。しかし、職員とのやり取りをする場面が毎日設定された事となり、注目行動ではないコミュニケーションのきっかけ作りができた。

一週間で完成するスタンプカードと比較して、現状は本人の興味関心が示されている。今後、数ヶ月に渡って支援を継続することで、本人の様子や興味関心を探る。スタンプカードにこだわらず、例えば体育館を借りて身体を動かしたり、普段は行かない所へ散歩に出かけたりといった不規則的な日課を取り入れる等、個別支援の検討を続けたい。検討を重ねることで支援内容の手数を増やし、本人が日々“楽しい”と感じながら通所し、生活の質の向上に繋がるよう支援を継続していく。

6. おわりに

主に重度知的障害、自閉症、行動障害を呈する方たちを受け入れてきたいちぼん星において、これまでと違うタイプである ADHD 傾向が見られる方の受け入れにより、職員が気づかされることが多くあった。集団における支援の中で、個別性を重視した支援も重ねて行う事により、本人が力をより一層発揮できる環境設定や活動設定の重要性について学ぶことができた。今後、継続して個別支援も重視した支援の検討を重ねる事により、職員の支援の幅が広がり、延いては他の利用者にもより良い支援が実施できるのではないかと考えている。